所報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港町塩口124
電話2-9772

「ハマボウ」の村指定文化財への登録に向けて

「ハマボウ」をご存じですか？「ハマボウ」は、海岸の砂地に生育する塩生植物で夏に黄色い花を咲かせます。南国に咲くハイビスカスと同属で、典型的な暖帯分布を示す植物とされています。花は一日花で七月中旬から八月上旬という短い期間にだけ咲きます。

「ハマボウ」の国内での北限は神奈川県の三浦半島と考えられてきましたが、二〇十一年に知夫村の海岸で発見され、国内最北限の個体の可能性が高いということが分かりました。専門家による調査も行われ、島根県版のレッドデータブックでは絶滅危惧種Ⅰ類となっています。

非常に珍しい植物であり、生息地が日本の北限の可能性があるということで、知夫村文化財保護審議委員会（以下審議会）が中心となり、これまで放置されてきた「ハマボウ」を村の指定文化財への登録を目指そうという機運が生まれました。

四月には、審議会が中心となり「ハマボウ」の周りに生えている大量の竹の除去作業を行いました。また、花が咲く最盛期の七月下旬に、審議会と教育委員会で企画した観察会「ハマボウを見に行こう」を実施しました。当日は、八名の参加があり、審議会会長の簡単な説明のもと観察会が行われました。知夫村で生育している「ハマボウ」は、海流によって運ばれたものが定着したらしく、樹齢は推定三十年といわれています。参加者の半数近くが、初めて「ハマボウ」を見て、「潮に浸かっても、よく枯れずに生育しているな。」と驚いていました。また、参加者の中から「ハマボウにとって生育しやすい環境を作りたい」という声が上がり、生息場所近辺の環境整備も実施することとなりました。観察会終了後、参加者全員で周辺のゴミ収拾を行いました。観察会を通して「ハマボウ」の生息実態を知るとともに、あらためて知夫村の海岸や自然環境について学ぶよい機会になりました。

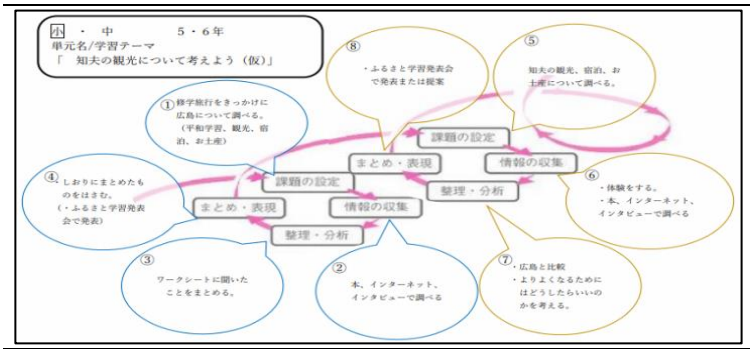
現在、村内で「ハマボウ」の知名度は決して高いとは言えません。しかし、生息地域の北限となる貴重な植物となることから今後も村の宝として大切に見守り「ハマボウ」の保全保護に向けた取組を地域と連携しながら行っていきたいと思います。

ふるさと教育の充実に向けて

七月二十五日に管内の小・中学校の担当者を対象としたふるさと教育研修が開催されました。今回の研修では、知夫小中学校のふるさと教育の取組を紹介しました。

知夫小中学校では、ふるさと教育が充実するよう「ふるさと教育担当者会」を組織しています。メンバーは、小学部と中学部のふるさと教育担当者と教育委員会事務局で構成されています。

ふるさと教育を進めるにあたって、小学部から中学部の九年間を入門期（小学部一、二年生）、前期（小学部三、四年生）、中期（小学部五年生から中学部一年生）、後期（中学部二、三年生）の四期に分け、それぞれ『知夫のよさに出会う』、『知夫のよさに気づく』、『知夫のよさ・課題を考える』、『地域の大人と協働し、知夫のために行動する』というテーマに基づいた学習に取り組んでいます。年度初めには『ふるさと教育わくわく大作戦』と称して、教員と担当者会のメンバーが集まり、児童生徒にふるさと教育を通して身につけさせたい力、協力依頼できる地域の教育資源（ひと・もの・こと）を共有し、発達段階に応じたふるさと教育が計画的に実施されるよう計画を立てます。



担当者会では、総合的な学習の時間における探求的な学習における児童生徒の姿をもとに「探求のサイクルマップ」作成し、情報収集や分析、他者との関わり、発表のプロセスの中で各期におけるねらいが達成されるよう工夫しています。

その一例として、小学部五・六年生は「知夫の観光」をテーマに学習を進めています。一学期の広島への修学旅行も探究のサイクルに位置づけ、他地域の取り組みと比較しながら、知夫村での取り組みを考えていくことに挑戦しています。

また、知夫村教育委員会では社会教育事業として、自立・協力・感謝の気持ちを育むため、発達段階に応じた宿泊体験活動を実施しています。小学校一年生から四年生の「初めてのキャンプ」小学校五、六年生の「隠岐の島町で泊まろう」中学校一年生から三年生の「ふるまい向上合宿」です。残念ながらこのコロナ禍の中で実施ができないこともありましたが、様々な地域資源に関わる中でふるさとのよさを身体全体で感じながら成長できる活動です。

知夫里島は、人口六百人という小さな島ですが、小さい島だからこそ大人も子供も全員が家族のような近さでくらしています。平成二十九年から「六百人の家族とくらす島留学」（島外出身の小学校五年生から中学校三年生）を実施しています。今後も少人数の島の強みを最大限生かした教育とふるさと教育の充実を目指していきたいと思います。

（派遣指導主事　山下）
（派遣社会教育主事　広兼）